

# TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

平成21年度 シンポジウム開催報告  
「水圏環境リテラシーと地域振興」,  
「大学における社会連携」

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/369">https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/369</a>

## 平成 21 年度 シンポジウム開催報告

佐々木 剛

本稿では、平成 21 年 12 月に開催した「水圏リテラシーと地域振興」および「大学における社会連携」に関する、以下の 3 つのシンポジウムについてご報告いたします。

水圏環境リテラシー教育とは、一般市民の海洋（河川・湖沼含む）の総合的理解力、すなわち水圏リテラシー<sup>\*</sup>を推進するための教育です。

このたび、アメリカ合衆国において水圏リテラシーの普及教育ならびに地域振興に取り組んでいらっしゃるアメリカ合衆国フロリダ大学シーグラントカレッジ教授マイク・スプラングラー博士、同大 COSEE フロリダ海洋教育コーディネーターであるカレン・ブライラー女史をお招きし貴重なお話を伺うとともに、日本とアメリカ合衆国の双方の取り組みについて盛んな情報交換を行いました。

### 福井県立大学海洋生物資源学部・東京海洋大学海洋科学部協働セミナー

#### 「水圏リテラシー教育と地域振興」

日時：平成 21 年 12 月 15 日(火)

開催場所：福井県小浜市福井県立大学海洋生物資源科学部

### 東京海洋大学～フロリダ大学学術交流協定・締結記念シンポジウム

#### 「大学における社会連携—アウトリーチと教育—」

日時：平成 21 年 12 月 17 日(木)

開催場所：東京都港区東京海洋大学

### さんりく ESD 閉伊川大学校主催国際シンポジウム

#### 「水圏リテラシー教育と地域振興」

日時：平成 21 年 12 月 19 日(土)

開催場所：岩手県宮古市宮古ホテル沢田屋

## シンポジウム概略

福井県立大学海洋生物資源学部・東京海洋大学海洋科学部協働セミナー

「水圏リテラシー教育と地域振興」

日時：平成 21 年 12 月 15 日（火）

開催場所：福井県立大学海洋生物資源科学部

### 1 開会の辞

### 2 歓迎の挨拶：青梅教授（福井県立大学）

水圏リテラシーと地域振興ということで、共同セミナーという形で開催することになった。地域とどのようにつながっていくかということが重要であるが、その点では水産高校が進んでいるかもしれない。県立大学としても模索しながら実施しており、この機会に深く勉強したい。

### 3 講師の紹介

### 4 水圏リテラシー教育とは何か？

### 5 質問・意見

（小坂教諭）

本日の小浜水産高等学校での生徒発表はどうであったか。

（ブライラー女史）

今日の発表会は、とても素晴らしい発表で感激した。今日の高校生の発表はアメリカの大学レベルと同じである。これからも頑張ってもらいたい。高校生が地域の方と取り組んでいることは素晴らしい。高校生の活動は地域の人々の希望になっている。頑張ってください。

（小坂教諭）

アメリカの大学では、アウトリーチ活動として教育を重要視しているが、なぜなのか？

（ブライラー女史）

たしかにアメリカでも、科学者と教育者の接点はなかった。しかし、COSEE センターにおいて科学者と教育者との共同講習会を開催した結果、科学者の反応がとても良く、参加した科学者が教育の重要性を認めるようになってきた。

（スプランガー教授）

また、研究者が全米科学財団（NSF）に補助金を申請する時は、どのように教育に絡めて研究するかを申請書に書かないと研究として認められない。地域コミュニティと一緒に研究することが重要であるという事を NSF は認識しているからである。

(青海教授)

1年間にどのぐらいの資金提供が政府からあるのか？

(スプランガー教授)

フロリダシーグラントカレッジは、毎年2億円が連邦政府、州政府、企業などから提供されている。ある地域のエクステンションでは、高等学校やフリースクール、海洋教育センターと一緒に活動することで、海洋教育が盛んな地域として認知され、1億円以上の利益が生み出された。シーグラントカレッジは、地域コミュニケーションをベースにして活動を行うことがとても大切である。

(青海教授)

小浜市は水産高校や、熱心な市民活動家の方がおり、また環境にも恵まれている。ぜひ、シーグラントカレッジのような仕組みを作れればと思う。

## シンポジウム概略

東京海洋大学～フロリダ大学学術交流協定・締結記念シンポジウム

「大学における社会連携—アウトリーチと教育—」

日時：平成 21 年 12 月 17 日(木)

開催場所：東京都港区東京海洋大学

**司会：竹内俊郎（東京海洋大学）**

それでは、シンポジウムを開催します。本学とフロリダ大学は 9 月に学術交流協定を結びました。本協定は、東京海洋大学とフロリダ大学が学術交流を深めることによって両大学の発展に資することを目的としたものであり、本日のシンポジウムは、その一環として行われるものです。本日の講師は、フロリダ大学のカレン・ブライラー女史とマイク・スプランガー博士、そして、通訳に地球環境戦略機構研究員のフランク・リング博士です。それではよろしくお願ひします。

**歓迎の挨拶：松山優治（東京海洋大学学長）**

この度は、フロリダ大学のマイク・スプランガー教授とカレン・ブライラー女史をお招きし、フロリダ大学・東京海洋大学学術交流協定締結記念シンポジウム「大学と社会連携—アウトリーチと教育—」が開催される運びとなりました。関係各位に熱く御礼申し上げます。先ほど、フロリダ大学のマイク・スプランガー教授より大学間の交流、教育の交流を提案していただき、本学としても学術交流協定を重要視しています。アメリカのシーグラントの活動については 40 年以上前から行われているということですが、我が国ではようやく 2007 年に海洋基本法が制定され、海洋に関する総合的な取組がスタートしたばかりです。今回のテーマである「アウトリーチと教育」という観点から言えば、海洋基本法 28 条では海洋教育を推進することが謳われており、海洋教育に関する教育・研究を実施していくことが求められています。本学では水圏環境リテラシー教育推進プログラムを 2007 年からスタートさせました。そのような教育研究を行う大学は他には例がありません。本学の責任は重大です。研究成果を社会に還元するというのが東京海洋大学の重要な責務の一つです。フロリダ大学の先進的な取組内容から多くのことを学び、今後の日本の海洋教育・研究の発展につなげていきたいと思ひます。

本日はよろしくお願ひいたします。

**講演後の質問への回答**

（スプランガー教授）

シーグラントカレッジの始まりはたった 4 つの大学であったが、結果を出すことによって予算も増え、シーグラントカレッジも増加して現在 33 大学に広がっている。最初、規模は小さいかもしれないが結果を出すことが必要である。

今回締結された、学術交流協定をうまく活用して学生の交換留学や、教授の訪問研究、そしてエクステンションスタッフ、教育者、事務職員の相互交流を積極的に進めたい。また、シーグラントカレッジでのスタッフトレーニングにも参加することが可能である。

### **プレゼン発表した学生からの意見**

卒業後も、リテラシー教育に携わっていきたいと考えているが、社会教育施設などへの就職は限られており、海洋大学に対してこうした分野の開拓に力を入れて頂き、水圏環境リテラシー教育を推進していただくことを願っている。

### **閉会の辞：和泉充（東京海洋大学産学・地域連携推進機構）**

産学・地域連携推進機構の役割は大学の研究リソースを日本国内における地域振興に役立たせるという使命を持っている。これに、相補的な役割を果たすものがリテラシー教育であると認識する。機構としてもバックアップ出来る体制を整えたいと思う。

## シンポジウム概略

さんりく ESD 閉伊川大学校国際シンポジウム

「水圏リテラシー教育と地域振興」

日時：平成 21 年 12 月 19 日(土)

開催場所：岩手県宮古ホテル沢田屋

### 開会の挨拶：中屋定基教育長

閉伊川大学校国際シンポジウムの開催、誠におめでとうございます。

7年前に水産高校の実習船リアス丸で岩手県下の不登校児童生徒の体験航海がありました。その時、閉伊崎の沖合でシーカヤックを漕いでいるところを見ました。それをみた不登校の生徒が「私もやってみたい」と言ったことが、海洋体験活動に興味を持ち始めるきっかけとなりました。不登校の生徒が「やってみたい」と意欲を示したことにとっても感激したのです。早速マリフィールドに入会し、ニュージーランドとの交流事業に参加し、ウォーターワイズの実践を視察しました。多くの子供達が個人のヨットを持って水辺に親しんでいました。宮古市教育委員会主催の「宮古ニュートンスクール」という催しで、山口川の探索をやっておりますが、私も参加して見聞きし水辺で学ぶということがどれほど素晴らしいものであるか実感しております。ここに集まった講師の方々が、水辺での活動を子どもたちに目を向けて実践されていることに感謝します。

今後とも、宮古のみならず三陸沿岸の子どもたちが水辺で活動出来るように願っています。宮古市も森川海が共生するまちづくりを謳っています。本シンポジウムを通して水圏リテラシー教育について勉強したいと思います。成功を記念して挨拶にかえたいと思います。

## 講演 1

### 水圏リテラシー教育とは何か

東京海洋大学准教授 佐々木剛

#### 問題の所在 1

近年、異常気象、地球温暖化など世界的に地球環境問題が深刻さを増しています。また、日本の各地域においても、水質汚染、ゴミの海洋投棄、外来魚の問題等様々な課題を抱えています。このような問題を解決するには、どうしたらいいのでしょうか？

東京海洋大学では、このような問題に立ち向かうために専門的で高度な研究とともに、地域住民のみなさんとともに取り組む水圏リテラシー教育が重要であると考えています。

このような問題を解決するには、どうするか？  
What should I do then?

- 専門的で高度な研究とともに、We need to have technical and high level research,
- 地域住民とともに問題解決に取り組む  
Engaging in solve the problem with community people.
- 水圏に対する認識・理解を高めるための教育（水圏環境リテラシー教育）が必要
- And need to have aquatic marine environmental literacy by educating people to enhance consciousness and understanding about aquatic and marine environment.

#### 水圏リテラシー教育の定義

水圏環境リテラシー教育とは、海洋、河川、水循環を含めた水圏に関する総合的な理解力を高める教育であり、水圏リテラシー教育は、水圏における地域住民主体の教育、すなわち、地域住民による、地域住民のための教育を重要視するものです。

この地域住民教育は、地域住民の主体的な水圏理解を促進させ、自然への探究心、自然を大切に  
する心、健全なる身体を養い、持続可能な社会の

構築、地域振興へと繋がっていくのです。これからの教育は、教える側のカリキュラムとともに、地域の課題（高齢化、文化の伝承、男女共同参画社会など）を解決し、地域の文化や自然を後世に伝えるための地域住民が主体となったボトムアップ型の教育が必要です。

#### 問題の所在 2

また、水圏環境は私たちの生活にとってなくてはならないものであると同時に、水圏環境は人間生活の影響を受けやすく、もろいものです。私たちは、水圏からどのような恩恵を受けているのか、そして水圏に対してどのような影響を与えているのかをよく理解する必要があります。

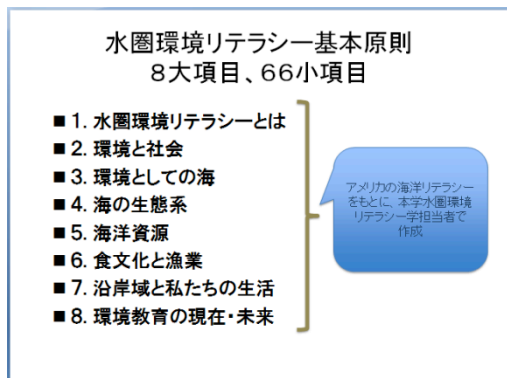
しかし、学校教育において海洋に関しては十分に教えられていません。多くの海洋関係者が懸念をし、訴えています。しかし、学習指導要領に  
取り上げるための「どの内容を当てはめるか」についての研究者、教育者同士のコンセンサスが皆無  
でした。

#### 水圏リテラシー基本原則

このような背景から、東京海洋大学は、水圏環境リテラシー基本原則を定めました。リテラシー基本原則は、地域住民と学校教育や海外におけるリテラシー教育とのネットワークを構築するための参照基準です。水圏環境リテラシーには、1 水圏環境リテラシーとは何か、2 環境と社会、3 環境としての海、4 海と生態系、5 海洋資源、6 食



文化としての漁業, 7 沿岸域と私たちの生活, 8 環境教育の現在・未来といった内容が含まれています。



この基本原則を柱として、リーダーを養成し、リーダーが地域に入り地域住民による水圏リテラシー教育を支援する役割をはたします。

4の新設科目について、「水圏環境リテラシー教育プログラム」のカリキュラムを示します。

◎教える側のつながりを重視したカリキュラム

「水圏環境リテラシー学」(水圏環境リテラシー基本原則習得プログラム)・・・

◎学習者の主体的な学びに対応したカリキュラム

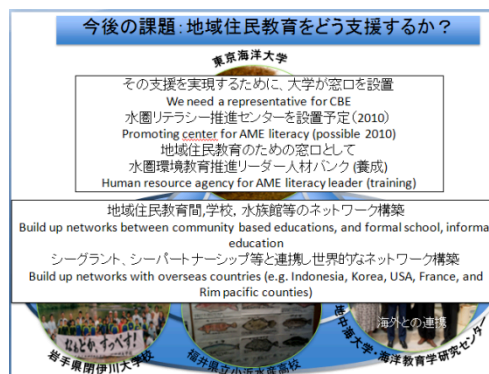
「水圏環境リテラシー学実習」(自然体験実践プログラム)

「水圏環境コミュニケーション学」(海洋科学教育実践プログラム)

「水圏環境コミュニケーション学実習」(地域住民との協働を促すための実践プログラム)



以上のようなプログラムを修了した学生は、水圏環境教育推進リーダーとして、地域住民とともに活動します。このことで、閉伊川大学校など地域主体型教育や水族館、そして学校教育、また海外との連携を有機的につなげ地域住民の皆さんが取り組む教育がより発展するように支援する事を目指しています。



**まとめ**

まとめとして、水圏環境リテラシー教育は、大学と地域住民の方々が有機的につながることで、このことにより大きな成果が期待される。水圏リテラシー教育を日本の各地域から発信できればと考えています。



## 講演 2

# NPO 法人いわてマリンフィールド活動の歩み マリンフィールド理事長 橋本 久夫

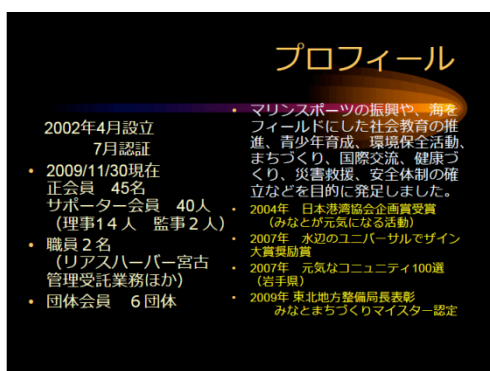
### 緒言

ここでは、私たちが NPO 法人で活動している内容について報告します。

マリンフィールドは、「海に学び、海に親しみ、海を活用する」という最大のテーマのもとに活動をしています。



NPO 法人マリンフィールドは、マリンスポーツの振興や、海をフィールドにした社会教育の推進、青少年育成、環境保全活動、まちづくり、国際交流、健康づくり、災害救援、安全体制の確立などを目的に発足しました。



教育者の方をはじめ、様々なメンバーの方に加わっていただいています。会員は 90 名近く、そのほかにも海に関係する各団体、岩手県小型船安全協会や岩手県ヨット連盟、ダイブネット宮古など、

海に関連する各団体を包括し、マリンスポーツの振興、海をフィールドにした社会教育の推進、青少年の育成、環境保全活動など、様々な活動に取り組んでおります。

ここでは、これまでの活動の中から、いくつかをピックアップして紹介しようと思います。

### これまでの主な活動

- ・ 自然環境保全活動（ゴミゼロ運動）
- ・ 海洋生物調査
- ・ 少年少女海遊塾
- ・ マリンスポーツ体験出前講座
- ・ 宮古湾横断遠泳大会
- ・ 一般シーカヤック教室
- ・ 身障者シーカヤック&ヨット教室
- ・ 不登校児童シーカヤック教室
- ・ 各小中学校、子ども会水辺学習
- ・ 留学生体験教室
- ・ 小中学校総合学習指導
- ・ ミニ FM 放送モデル事業
- ・ 教育旅行受入
- ・ ハーバーコンサート
- ・ シルバーヨット教室
- ・ 先生のためのマリンスポーツ教室
- ・ ハーバーまつり
- ・ 三陸シーカヤックマラソン大会
- ・ ちびっこトライアスロン大会（支援）
- ・ みなとウォッチング（支援）
- ・ 宮古港ボート天国
- ・ ニュージーランド青少年国際交流
- ・ 海と風の学校
- ・ 海の達人講座

- ・ 地域づくり講演会等
- ・ 都市再生プログラム事業
- ・ 漁り火ツアー
- ・ みなとイルミネーション

## 自然環境保全活動

毎年5月30日を「ゴミゼロの日」として、その前後に海の清掃活動を行っている。陸上のみならず、ダイブネット宮古が協力して海底に潜り、ゴミを回収するほか、シーカヤックを用いて水面の浮遊ゴミの回収なども行っております。



## 少年少女海遊塾

自然体験型プログラムとして、少年少女海遊塾を開催しています。私が以前から主催している宮古ジュニアヨットクラブに端を発し、一般の子供たちにもマリンスポーツなどを体験してもらう機会をもうけたので、子どもたちにヨットの楽しさ、シーカヤックの楽しさ、あわせてロープワークの体験学習を行っています。これらの体験を通して、地形などの自然に関する基礎知識を身につけ、日常生活の中でも生かしてもらいたいとともに、故郷の海や自然環境の素晴らしさを感じてもらいたいと考えております。

## 海洋スポーツ体験出前講座

海から遠い郡部の小中学校を訪問し、海に来られない子どもたちのために、プールや近くの川を

利用した水に親しむ出前授業を提供しています。多くて年間10校ほど訪問する場合もあり、約2〜300人の子供たちがこのような体験をし、ここで学んだことを実際海に来て、また海で体感してもらうという仕組みを作ったものです。

なかなか海の町に住んでいながらも、マリンスポーツに親しむ機会というのが少ない子どもも多いという現状で、私どもの考えとしては、少なくとも子どもたちが20歳になるまでに、「ヨットやったよ」、「カヤックやったよ」と言える程に、地域の海の文化をあたりまえのように感じてもらいたいと考えています。この出前授業は、岩泉や山田、釜石の方まで実施しています。

## 体験教室—すべての人に海原の喜びを

すべての人に海原の喜びをというテーマで、ユニバーサルデザインヨットを導入し、シルバー教室、身障者教室、一般対象、不登校児童教室を、体験教室として実施しています。

ヨットは、ユニバーサルデザインヨットというものがオーストラリアで開発されており、私どもはそれを2艇ほど導入し、活用しています。ユニバーサルデザインとは、年配者の方でも、体の不自由な方でも気軽に乗れるヨットがあり、シーカヤックについても、足の不自由な方も一緒に海を楽しんでもらえるよう、サポートをしています。また、ユニバーサルデザインではなくても、それに近いようなヨットなども活用しながら、多くの方に海の素晴らしさを体感・体験してもらう事業です。



### 水辺活動—海と風の学校—

海と風の学校は子供達を対象とし、水辺活動として数年前に実施していたものです。色々な海に関する素材を使って、子どもたちに色々なことをやらせようと、シーカヤックやヨット教室はもちろんだが、シュノーケリング、ビーチコーミング、サンディキャンドル作りや、船を出して海辺体験などを実施しました。さらに、宮古湾から海水を汲んできて自分たちで塩を作るという、塩づくりも実施しました。このように、海と風の学校とは、子供達のための海に関する多彩な体験メニューを備えています。

### 宮古湾横断遠泳大会

宮古湾横断遠泳大会というイベントが始まって、10年目になります。遠泳は、宮古と白浜の間の1.3キロを泳ぐというもので、毎年実施しています。こちらユニバーサルデザインの考え方に基づいて、体の不自由な方にもご参加いただき、色々な方にチャレンジしてもらうことができます。およそ10歳から74歳までの方で、毎年50～60人ほどが参加しています。目の不自由な方、足の不自由な方、なども10名前後出て、近年は遠くは関東から訪れる方もいるほど普及してきました。

### 海旅

三陸海旅というイベント事業が発端となり、越

中海岸の新しい観光ルートを創造し、カヤックで見ながら楽しもうということで、3年前から実施しています。身近に海を体感し、ウミネコの乱舞などを見ることができ、観光事業ではあるものの、普段は入れないようなところまで行けるというのが大きな魅力であり、プログラム化していけば、地域振興にも結びつくのではないかと考えて実施しています。

### 三陸シーカヤックマラソンレース

全国各地から毎年130艇ほどが出場し、国内でもベスト3の大会規模を誇るものです。キッズ部門、シニア部門も設置しています。シーカヤックマラソンで、100艇を超えるレースは全国でもほとんどなく、奄美大島とこの大会と、伊豆にもうひとつあると言われており、ほかは平均50～60艇です。100艇を超えるレースが10年間も続いているということは、三陸シーカヤックも、全国的に知られるイベントに育っていると考えると考えています。



### ニュージーランド青少年交流事業 —海で結ぶ友情の絆—

2004年からニュージーランドとの青少年交流事業を開始しています。帆のまちといわれるニュージーランド・オークランド市とネルソン市の3クラブと交流し、ホームステイをしながらセーリング、海の文化を通じた国際交流を実施しています。

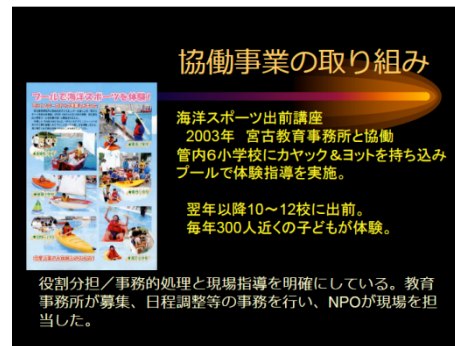
これまでに小中高校生延べ 50 人を派遣しました。ここでは、子どもはウォーターワイズ・プログラムを学び、子どもたちはセーリング文化と異文化を体感しながら、国際交流の感覚を身につけることを目的としています。ウォーターワイズ・プログラムとは、ニュージーランドにおける水に賢くなるためのプログラムで、学校とウォーターワイズ・プログラムの学校とが連携して、小さい頃から水に賢くなるように学習していきます。マリンスポーツの技術習得をはじめ、海洋生物や自然環境、指導者のためのいろんなプログラムの指導など、様々なプログラムを包括したものがウォーターワイズ・プログラムということで確立されています。これが今、ニュージーランドを発祥として、世界中に少しずつ広まっており、子どもは研修を受けたことで、宮古版ウォーターワイズ・プログラムというのを意識して、事業をやっています。



## 協働事業の取り組み

海洋スポーツ出前講座は、2003年 宮古教育事務所と協働で実施しました。管内6小学校にカヤック&ヨットを持ち込みプールで体験指導を実施し、翌年以降は10~12校に出前しました。毎年300人近くの子どもが体験しています。

運営にあたっては、役割分担/事務的処理と現場指導を明確にしておき、教育事務所が募集、日程調整等の事務を行い、NPOが現場を担当しました。



- 海の達人講座（宮古教育事務所）
- 教職員マリンスポーツ体験（宮古教育事務所）
- 不登校児童カヤック教室（宮古市教育委員会）
- 宮古湾藻場記録調査事業（宮古栽培漁業センター）
- リアスハーバー宮古受託管理（県）指定管理者  
成果/行政と NPO の役割分担によってそれぞれの機能を発揮することで、事業が推進しました。行政の担当者の NPO に対する理解が大きかったことも成功の要因です。特に大きな問題点もなく、出前講座は自主活動で続けています。

今後も、地域の特性を活かしながら、ニーズに応えた活動をしていきたいと考えています。NPO との協働は官と民との連携した公であります。公という観点をどれだけ意識し、多くの市民、県民にサービスができるかが、ポイントでしょう。

## 都市再生モデル事業

- ・ 2007年 全国都市再生モデル調査に全国から157件が選定された。
- ・ 宮古湾周辺における親水空間の形成による新観光資源創出プロジェクト
- ・ 美しい海と自然景観など、海やみなどを介した宮古市の地域資源を活かした地域振興の検討

### 環境保全プロジェクト

- ・ 環境潜水調査
- ・ 環境保全ポスターコンクール

## 親水空間形成プロジェクト

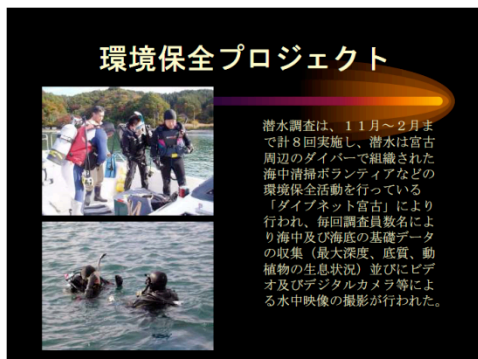
- ・ドライブインシアター・みなとイルミネーション
- ・漁火ツアー・ユニバーサルデザイン型マリンスポーツ体験

## 情報発信媒体の運営及び作成

- ・ミニFM放送（防災情報）・メルマガ発行

## 環境保全プロジェクト

潜水調査は、11月～2月まで計8回実施し、潜水は宮古周辺のダイバーで組織された海中清掃ボランティアなどの環境保全活動を行っている「ダイブネット宮古」により行われ、毎回調査員数名により海中及び海底の基礎データの収集（最大深度、底質、動植物の生息状況）並びにビデオ及びデジタルカメラ等による水中映像の撮影が行われました。



## ドライブインシアター

親水空間を創出するためみなとオアシス「シートピアなあと」のある出崎埠頭においてドライブインシアターを実施しました。スクリーンには、敷地内にある宮古漁業協同組合製氷工場を利用し、そこに、縦5メートル横13メートルの大きさに映像を映し出しました。音声はFMを利用し、カーラジオや携帯ラジオから受信しました。

## みなとイルミネーション

親水空間を創出するためみなとオアシス「シートピアなあと」をイルミネーションによりライトアップし、シートピアなあとの利活用及びPRを行いました。

平成19年12月15日スタートし、現在に至っています。LEDイルミネーション25000個を使用しています。

## 漁り火ツアー

三陸沖のイカ漁は秋にピークを迎え、沖合には多くの船が集結し煌々とした漁り火が幻想的な世界を作り出します。そのロケーションを生かしながらイカ釣り体験をします。それらを体験型観光プログラムに組み込む可能性を探っています。平成19年10月にスタートし、今年で3回となりました。

## ミニFM放送（防災情報）

そして今、住民がコミュニティー意識を共有するためのまちづくり情報媒体を運営・作成し港を中心とした情報発信と、ネットワークづくりのために、情報発信や防災情報のために、ミニFMを使ったラジオ放送の実験放送に取り組んでいます。具体的には、防災訓練などのイベントに参加して、ラジオ番組を作って放送し、マリンスポーツや海の情報を発信する、知らせる手段となっています。インターネットをはじめとして、独自に私どもがこのような情報網を持つことによって、さらに海の情報を発信でき、海的话题を発信でき、そして最終的には防災などに、地域コミュニティーの中で活用できるのではないかと、そしてそれがまちづくりの手段になるのではないかと考えています。宮古市総合防災訓練に参加し、会場での災害情報発信訓練の実施をはじめ、宮古市産業まつり、毛ガニまつり、宮古港ボート天国、シートピアな

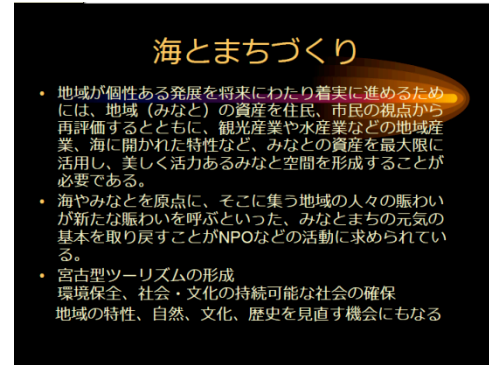
あど、キャトルなど様々な場所で放送を展開しています。

### 海とまちづくり（今後の課題として）

地域が個性ある発展を将来にわたり着実に進めるためには、地域（みなと）の資産を住民、市民の視点から再評価するとともに、観光産業や水産業などの地域産業、海に開かれた特性など、みなとの資産を最大限に活用し、美しく活力あるみなと空間を形成することが必要です。

海やみなとを原点に、そこに集う地域の人々の

賑わいが新たな賑わいを呼ぶといった、みなとまちの元気の基本を取り戻すことが NPO などの活動に求められています。



**海とまちづくり**

- 地域が個性ある発展を将来にわたり着実に進めるためには、地域（みなと）の資産を住民、市民の視点から再評価するとともに、観光産業や水産業などの地域産業、海に開かれた特性など、みなとの資産を最大限に活用し、美しく活力あるみなと空間を形成することが必要である。
- 海やみなとを原点に、そこに集う地域の人々の賑わいが新たな賑わいを呼ぶといった、みなとまちの元気の基本を取り戻すことがNPOなどの活動に求められている。
- 宮古型ツーリズムの形成  
環境保全、社会・文化の持続可能な社会の確保  
地域の特性、自然、文化、歴史を見直す機会にもなる



### 講演 3

## ダイブネット宮古の活動について ダイブネット宮古事務局 田中富士春

こんにちは。私は、田中富士春と申します。今日は、このような機会を与えていただきありがとうございます。

### ダイブネット宮古の概要

ダイブネット宮古発足についての概要を紹介します。DNMは、2000年に組み込まれていた海底清掃プロジェクトに参加していた地元のダイバーによって2001年に発足され、現在、大学教員、高校教員、会社員、主婦、自治体職員など約30人のメンバーで活動しています。

ダイビング技術を活用したボランティアによる地域の環境保全活動を目的とした、

- 1 海底清掃 Underwater Cleaning
  - 2 水中生物調査 Research on Sea Life
  - 3 海洋教育 Marine Education Program
- を行っています。



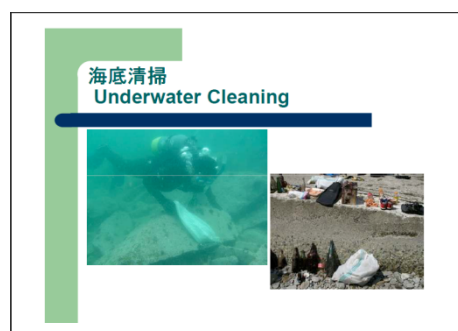
### 海底清掃

まず、海底清掃について紹介します。

海底清掃については定期的に行っています。宮古の代表的な景勝地である浄土ヶ浜やマリンスポーツの拠点施設であるリアスハーバー宮古のほか、県職員を中心にボランティア海底清掃活動を行っ

ている団体と連携して、大船渡の漁港などでも清掃活動を行っています。

こちらは浄土ヶ浜での清掃活動の写真です。私たちはそれぞれにゴミ袋を持って海底に潜り、ビンや缶、時には電池などを回収します。



### 水中生物調査について

会員の持つダイビング技術を活用して、水中生物の写真やビデオを撮影して、地域の海の生物調査を行っています。県立水産科学館と連携して浄土ヶ浜の生物調査、山田町の「鯨と海の科学館」と連携して、山田湾の生物調査を実施しました。宮古湾においては国の補助事業を活用して生物調査を実施しました。

宮古湾でダイビングをする人はあまりいないと思いますが、宮古湾には多くのおもしろい生物が見られます。宮古湾では、色々な種類の美しい、体長1センチ以下のとても小さなウミウシを見ることができます。



もう一つダイビング技術を活用した活動として、青少年に対する海洋教育活動があります。社会教育施設である陸中海岸青少年の家と連携して、シュノーケリング技術講習の講師として協力しました。シュノーケリングは宮古であまり一般的ではないので、生徒たちは泳いで生物を観察するのを楽しんでいました。

また、いわてマリフィールド主催のシュノーケリング教室の講師も務めています。

私たちはシュノーケリングについて、マスクや足ヒレなどの道具の使い方を教えます。子ども達はみな、ライフジャケットを身に付けて、泳ぎながら海の生き物を観察します。



この少女たちが何をしているかわかりますか？彼女たちは海の水をなめているところで、しょっぱいということに気づいたのです！

では、こちらはどうでしょうか？彼らはカニや貝や小魚のためにプールを作っています。



私たちがどのように海洋教育プログラムに携わっているかを紹介する前に、一つ言っておきたいことがあります。私達は全ての活動をボランティアとして実施しています。私達は自分たちの技術を地域の発展に生かすことができ非常に幸せですし、また、地元の海をきれいにすることに貢献でき、新しい海の生物についての知識を得ることができ、そして子供達が水中でのスキルを学ぶことをサポートできて、幸せです。それはまさに私のやりたいことなのです。

最後にまとめとして DNM の今後の展開に向けた課題についてお話しします。

まず、スクーバダイビングやシュノーケリングについて、地域の海を知るにはとてもよい活動ですが、なかなか市民に普及していません。

これは漁業とマリンスポーツ活動の区域の割当などの海のルールが明確化されていないことが大きな理由です。法令的には地域の海でダイビングなどを行うことは何の問題ありませんが、やはり安全かつトラブルなく海中生物の観察などを行うためには、漁業者との調整を行い、活動区域を明確化することが必要と考えています。

これはダイビングに限らず、ヨット、シーカヤックなど他のマリンスポーツにおいても同様のことと思われます。

2つめの課題として、当会で行った調査成果を地域の漁業振興、観光振興などの産業振興、あるいは教育活動の振興などに役立てるということです。三陸の海は非常に豊かですが、これを守っていくためには地域の海について市民がよく知ることが大切です。

例えば漁業振興のため藻場を育成するには、現状の生物の分布や海中の状況を把握することが必要であります。また、宮古周辺の海で珍しい地形や他の地域にない生物の存在を確認できれば、観光資源ともなり得ます。



そして、これらの地元の海について特に次代を担う子供たちの教育活動の中で紹介することは、青少年の健全な育成において有益なことと考えています。

最後に、私たちは今後もさまざまな団体と連携しながら機会を捉えて地域の環境保全のため活動をしていきたいと考えているが、今回のように国内そして諸外国の教育機関と連携していくことも非常に重要と考えており、本日は貴重な機会を与えてくださった主催者の皆様に感謝申し上げます。

